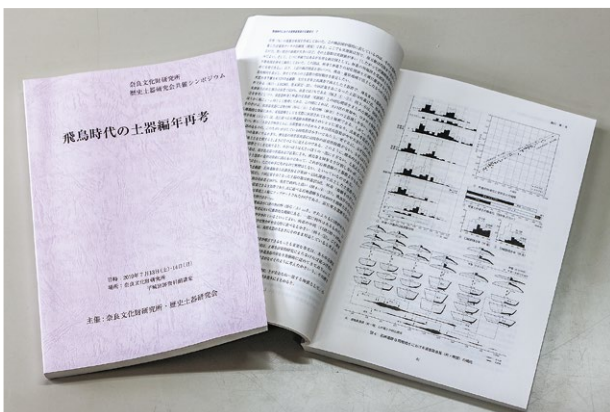


研究集会「飛鳥時代の土器編年再考」の開催

7月13・14日の2日間、歴史土器研究会との共催で研究集会を開催しました。テーマは、飛鳥時代の土器の年代観を改めて検討し直していただくことです。飛鳥時代の土器が時代とともにどのように推移・変化したのかについては、1970年代に現在の通説である5時期区案が示されて以来、暦年代観の微調整はありましたが、今日まで基本的な認識の枠組みに大きな変更はくわえられていません。しかし、石神遺跡をはじめとする飛鳥地域の遺跡や、藤原宮・京から出土した土器群の研究が進む中で、これまでの暦年代観や土器様相の変遷観を単純に適用するだけでは、説明できない土器の存在があきらかになってきました。

そうした状況をふまえ、研究集会では宮都と各地の土器研究者7人による研究報告の後、約2時間にわたって討論をおこないました。討論では紙上報告者1名もくわわり、活発に意見がかわされました。実物の土器資料を見て議論をしようという趣旨のもと、あわせて開いた土器見学会もすこぶる好評で、最終的に284名もの参加者を得て、大変賑やかな研究集会となりました。

共催の歴史土器研究会は、奈文研の研究者が呼びかけ、古代宮都遺跡の発掘調査従事者が集まって、1984年に結成した研究会が母体で、現在は広く歴史時代の土器を研究しています。奈文研では、官衙や古代瓦の研究集会を継続的に開催していますが、土器の研究集会は久しぶりでした。研究成果を広く知っていただけるよう、今後も同様の企画を考えてゆく予定です。
(都城発掘調査部 尾野 善裕)



研究集会で刊行した発表要旨集